

七曲りの坂の不思議な話し（漆原町）

昔、石生谷から宮崎村へ行くにはトンネルが無く、峠の山道を超えて行きました。

その山道は幅が五十センチ程で、広い所でも一メートル位しかなかったといいますが、山への登り口には、さんまい（火葬場）があり、木もうつそつりと茂り、気持ちの良い山越えではなかったそうです。

峠の手前には岩が四つあり、その岩はぼたもちの形に似ていて二段重ねにおかれていたのでぼたもち岩と呼ばれ、行き交う人々がここで腰を降ろし一服したそうです。

ある時、村の若者が山向かいの親せきの家の法事に行き、ほろよい機嫌で七曲りの坂を通る途中、若い女の人がしゃがみこんでいるのをみつけました。

「もしもし、どうしなはつたんやの?。」

と若者が聞くと、

「急に腹がいたうなって、歩けんようになってしまったんやって、」

「ほれは、おおごっちゃ（大変）。うら（わたし）

がおんぶして下まで送ってあげるわの。」

「ほんなこと気の毒やし、悪いわの。」

「遠慮しなはらんでいげの。」

と若者がしゃがんで背中を向けて言うので、

「悪いの、気の毒やの。」

と何度も言いながら、娘は若者の背中におんぶされました

「今時分、どうしなはつたんやの。」

「宇須尾のおんさま（叔父）の具合が悪つて見舞

いに行ったら、久し振りに会つたで話がなごう

（長く）なつてもつたんやげの。」

「ほうけの。」

としばらくは話をしていましたが、だんだんと静



かになってきて、背せ中ちゆうも重おもたくなってきたので若者わかしよは不思議ふしぎに思い振り返かえつてみると、何と おんぶおんぶしていたはずの娘むすめは大きな石いしになっていました。若者わかしよは びっくりして背負せおっていた石いしをなげすてて急いそいで家いへまで走はしって帰り、家いへの人に話はなしたところ

「ほれは、おきつねさんの仕業しごに違いちがいねえわの、化ばかされたんやぞ。」
と言いわれ、思おもい出ですと背中せちゆうがゾーとして体みが震ふる

えてきました。

このような狐きつねのうわさも広がって、人々は七曲しちまがり坂さかを通とほることをとて怖こわがりました。

「七曲しちまがりの山越たけえは大変たいへんだ。トンネルがほしい」と言う声こゑが高まり、大正時代たいしやうじだいにトンネル工こう事じが着工ちやくこうされました。

最初のトンネル工こう事じは難航なんかうし、五メートル程ほど掘ほつたが、岩いが崩くずれ落おちるので、その下したの方ほうへ掘ほり直なおしたのが今のトンネルだそうです。

トンネルが出来てからでも雪崩なだれで出入口でぐちがふさがれて、七曲しちまがりの坂さかを越こえなければならぬことが何度なんどもあつたそうです。